
兄

いえやす

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄

【著者名】

【作者名】
いえやす

【NNマーク】

N7382D

【あらすじ】

優しかった兄は、死を間際にしてどんどん変わっていました。

『なあ、元気出せ。知ってるだろ？

親つてのは、木の上に立つて俺たち子供を見てるんだ。

お前が落ち込んでると、母さん、心配で木から落っこちやうぞ
木登りなんかしたこと無い人だつたんだから

大丈夫だ。心配するな。俺がついてるんだから』

母が亡くなつた時。

ふさぎ込む俺のことを兄がそう言つて慰めてくれたときのことを
思い出した。

兄のそういうた氣遣いに俺はこれまでどれだけ助けられてきたことか。

俺だけじゃない。学校でも職場でも人気者だつた兄。誰もが兄の
ことを慕つていた。

なのに、こんなことになつてしまつなんて。

「……じつちは病人なんだぞ！ もつと氣を使え！」

病院のベッドの上、枯れ木のように瘦せ細つていいく兄は、ますま
す手が付けられなくなっていた。

「兄貴、いい加減にしろよ。佐枝子さんだつて疲れてるんだよ」

「それがどうしたよ！ 俺はもうすぐ死ぬんだ！
これ以上我慢なんかしてられるか」

なにか言い返そとしたとき、兄嫁の佐枝子さんが俺を止めた。

「やめてください。わたしが悪いんですから」

「そうだ。そのとおりだ。お前らのせいだ。
お前らのせいで俺は死ななきやならないんだ！」

今にも泣き出しそうな佐枝子さんの細い肩をつかむと、俺は強引に病室の外に出た。

「これまで散々お前たちのわがままを聞いてきたんだ。
最後のときくらい本音をいわせる！」

耳をふたたべたくなるような罵声が後ろから追いかけてくる。

「……『やめんなさい』。私のせいです」

「佐枝子さんが謝ることない。
それより兄さんひどすぎるよ。いつもあんなのか？」

佐枝子さんは黙つてうなずいた。

兄が入院したのは3ヶ月前のこと。

精密検査を受けて末期のがんであることがあきらかになると、兄はまったく人が変わってしまった。

どんどん暗く、陰湿に。どんどん嫌な人間になってしまっている。
そう遠くない死が確定した今では、俺たちを苦しめていたのを晴ら
していいようにしか見えない。

もちろん、俺には兄の無念も苦しみもわかるつもつだった。
だからじつと耐えていた。

あの日までは。

「なあ、佐枝子。……お前の横に鳥がいるぞ」

食事中、ぽつりと兄がそう言つた。

ついに幻覚が見るようになったのかと驚いた俺たちの顔を確かめながら、兄は低く笑いだした。

「……佐枝子。お前の脇にいる鳥なんだぞ？ わかるだろ？」

鶲だよ、鶲。

この浮氣女！」

俺も佐枝子さんも凍りついたように動けなかつた。

佐枝子さんを慰める内に俺と彼女の距離は急速に縮まつていた。二人の間にはお互いを支えあう繋がりができつつあった。病人の敏感さで兄はそのことを感じとつたようだつた。

「知つてゐるぞ！ この人でなしども。

俺が死ぬのを一人して待つているんだろ？

そうなんだろ？」

その言葉に込められた剥き出しの悪意に俺の頭の中も真っ赤になつた。

氣づけば俺は兄とにらみ合つていた。

「お前……。やつぱりそうだったのか。畜生！」

これまでお前のせいですつと苦しめられてきて、結局こいつなるのか。この野郎！」

兄が腹立ち紛れに投げたフォークが俺のあごに見事に刺さつた。床に落ち派手な音をたてて転がるフォーク。そしてしばらくの沈黙。

呆然としていた佐枝子さんは我に返ると、兄に冷たい一聲を「え、ハンカチを取り出して俺のあごの血をぬぐつた。

「……畜生……」

興奮しすぎたせいか、兄はベッドに倒れこんだ。
そして苦しそうに息をしながらにつまでもぶつぶつぶやいていた。

「畜生、畜生、うらりんでやる。うらりんでやる。畜生、畜生……」

その夜兄は死んだ。

ベッドから床に落ちてつぶせに倒れるように死んでいたらしい。
田を見開き、口から血を吐き出しながら。

5

初七日が終った頃。

弔問客も途切れ、家には俺と佐枝子さんだけになった。

「佐枝子さん。兄貴は死んだ。
これからはあなただけ幸せにならなきゃいけない。
俺でもし力になれるなら……」

「……ダメです。まだ四十九日だって済んでいないのに

「今でなくていい。もう少し落ち着いたらでいいんだ

俺は弱々しく首を振る佐枝子さんを強引に抱き寄せた。
抱きしめられた佐枝子さんは、少し戸惑いの後、俺を受け入れてくれた。

そして長いキスの後、じつと見詰め合ひ。

佐枝子さんが俺の右の顎の絆創膏をそつとなでた。兄につけられた傷はなかなか治つてくれなかつた。絆創膏は粘着力が弱まつていたのか、大した力も入つてないだろうにはらりと床に落ちた。

その瞬間。

傷に視線をやつた佐枝子さんの目が大きく見開かれた。わなわなと。

あごの傷を見つめながら、俺を突き飛ばして大きな悲鳴を上げた。俺は訳もわからずそばにあつた鏡を覗き込んだ。そこには、兄がいた。俺のあごに兄の顔があつた。ぱっくり開いた傷は口で、傷の上部にできた吹き出物が鼻と目だつた。まさしくそれは兄の死に顔にしか見えなかつた。

兄が死んで3ヶ月。

佐枝子さんは出て行つた。もう帰つてはこないだろう。あごの傷はいつまでたつても治らない。

ある日、一人で鏡を見ていて不意に気が付いた。

俺の右のあごにできた兄の顔。その左側には俺自身の口。

「兄」の左側に「口」。

……なるほど。これはやはり「呪」なんだ。

ぼんやりとそう思つたとき、鏡の中で兄の顔と目があつた。

兄の顔はニヤリと笑い、傷口からは黄色い膿がどくどくとあふれ出てきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7382d/>

兄

2010年12月20日03時55分発行